

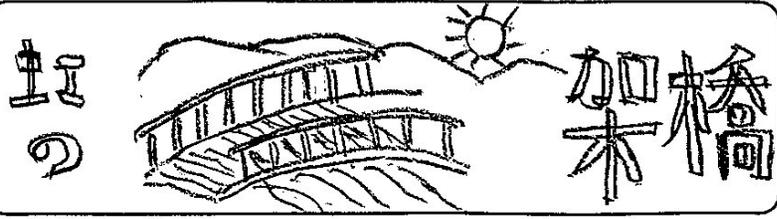
今月の題字
吉澤滋さん

(みどり市大間々町)

大間々小学校1年1組で一緒になってから65年。今でも「ながめ黒子の会」や神明宮の崇敬会で一緒に活動している気心の知れた幼馴染みです。

虹の架橋

検索で、インターネットからでもご覧いただけます。



第六十七回関東菊花大会に併せて十一月三日に「ながめ公園清掃」

今年も十一月三日(水)朝七時から、多くの人達に参加を呼び掛けて「ながめ公園周辺自主清掃」を実施いたします。(ながめ公園西駐車場集合。約五十分の活動)
平成十三年、ながめ余興場で国民文化祭が開催されたことをきっかけに市民有志による自主清掃として始まった活動は今年で二十四回目を迎えることになりました。



2023年11月3日の掃除風景

ながめ公園周辺自主清掃
☆11月3日(日・祝日)
☆朝7時~7時50分
☆ながめ公園西駐車場集合
☆作業は、ながめ公園周辺の枯葉やゴミ拾い、雑草・雑木除去等。ゴミ袋はみどり市が提供。掃除道具をお持ちの方はご持参下さい。

イドの会、桐信大間々支店、しのめ信金大間々支店、みどり市倫理法人会、ミツバ赤城工場などの企業や団体の他、毎年家族揃って参加してくれる人たちなど百名以上が爽やかな汗を流しています。
掃除をすることで掃除をした場所への愛着や誇りも生れます。大間々を訪れる人に「人も自然も美しい」と感じてもらうために多くのご参加をお待ちしています。
北関東最大級を誇る菊花の祭典「関東菊花大会」が今年も「ながめ公園」で開催され、毎週土・日曜日は菊華寄席も開催されます。



小耳にはさんだ
いい話
(文責・菊)
《351》

あの人に会いたい

の円熟した富弘さんの笑顔や温かみのある声が画面から流れ、改めて富弘さんの魅力を感じました。

富弘さんは体育教師になった二か月後に部活の指導中にケガをして首から下が全く動かなくなりました。「早く命が終わればいい」と思った富弘さんでしたが、お母さんは入院中の九年間ずっとベッドの横の狭いところで寝起きして看病を続けました。富弘さんの『ペンペン草』の作品にはお母さんへの思いが込められています

神様がたった一度だけ
この腕を動かして下さるとしたら
母の肩をたたかかせてもらおう

世界一小さな
定利屋
トイレ美術館

今月の絵《351》

大野勝彦さん『笑顔地蔵』



今年も熊本の義手の詩画家・大野勝彦さんのカレンダーが出来ました。(税込一六五〇円)
十二枚の詩画は金色の枠に沿って切り取ると色紙額に収まる大きさです。二〇二五年一月のカレンダーの作品は、三人の優しいお地藏様の絵に「やさしさの中」といって笑顔になれる。そのやさしさが集まった中に私はいるのですね」という気づきの言葉が添えられています。
大野さんは、四十五歳の時に不慮の事故で両手を切断、以来二本の義手で命の輝きを描き続けています。カレンダーのご注文は大野勝彦美術館へ。足利屋にもあります。

風に揺れるペンペン草の
実を見ていたら
そんな日が本当に
来るような気がした

富弘さんは番組の中で「花って秋になると枯れてきますよね。でも虫に食われちゃったり、花びらが揃ってない方が面白い。自分の嫌な面も繕わず、そのまま受け入れて生きる方が楽だと思いませんか」と話していました。
七十八年の生涯を全うされた富弘さんから、全てを受け入れ、ありのままに生きる強さと優しさを教えてもらいました。



富弘さん宅で高校の先輩と後輩で乾杯!

「あの人に会いたい」と思った時、やさしさにいつでも逢える富弘美術館があり、富弘さんを囲んで撮った皆さんの写真が私たちに「がんばれよ」と声をかけてくれます。

靖ちゃん日記

令和六年十月四日(金)
ながめ余興場で中村勘九郎・七之助錦秋歌宴夜特別公演が開かれた。十八世中村勘三郎十三回忌追善公演でもあり、入口には勘三郎さんの遺影と生花が供えられていた。昨日の朝は八時に大型トラック三台が到着。大道具小道具の運び込みも黒子の会が手伝った。舞台と花道には足のすべり防止用の板を敷きつめた。
二日間の三公演に集まった千七百人の来場者は七之助さんの常盤御前、鶴松さんの牛若丸、勘九郎さんの弁慶の「五條橋」での大見得を切るシーンに大満足だった。
今から三十年前、鹿嶋同然だったながめ余興場を壊して文化センターにするという案があったが黒子の会を結成して保存活用運動を起して芝居小屋が生残り続けた。あの時「将来ここで歌舞伎公演をやると見得を切つ左黒子の会の弁慶」連は、夢を叶えて赤子のように無邪気な牛若丸に存していた。

豊の秋(とよのあき)という季語は、豊作の年に使われる季語で、豊年に感謝し、喜びを分かち合うという意味が含まれているそうです。
自分の人生を振り返ってみると、「青春、朱夏、白秋」の年輪を重ねてきました。六十代後半からは「玄冬」と呼ばれ、次の春を待つように、次の世代や次の世代に知識や願いを残していく年代になってきました。自分自身は気持ちの上では青春真っ只中だと思っ